

目次 ■2019年3月23日キューバ友好フォーラム報告…2~4 ■会員・読者から円卓会議への手紙…4 ■キューバの呪い⑦…5~6 ■報告 2019年7月7日「ベネズエラを知る集い」…6 ■2019年メーデー国際ブリガダ参加とハバナ印象記…7~9 ■キューバ外務省声明…10

2019 キューバ友好フォーラム

9月7日(土)

13:30~16:30 開場 13:00

会場 日本記者クラブ大会議室

TEL 03-3503-2721

東京都千代田区内幸町2-2-1

日本プレスセンター9階

東京メトロ千代田線・日比谷線「霞ヶ関駅」C出口、丸ノ内線「霞ヶ関駅」B2

出口、都営三田線「内幸町駅」A7出口、

JR「新橋駅」日比谷口(SL広場側出口)

参加費 1000円(会員500円)

事前申し込みは必要ありません

変貌するラテンアメリカ

ラテンアメリカで大変化が進行し、世界の注目を集めています。ラテンアメリカと言えば、かつては軍事政権が多い地域というイメージが強かったが、20世紀末ごろから、左派・中道左派政権の誕生が相次ぎ、21世紀初めにはラテンアメリカ諸国の半分近くが、そうした政権になったと言われたものです。

が、2013年ごろから、左派・中道左派政権の退潮が始まり、2015年には、アルゼンチンで中道左派政権に代わって中道右派政権が登場、ベネズエラでは、マドゥロ左派政権が総選挙で野党連合に大敗しました。2019年初頭には、それまで左派政権が続いていたブラジルで極右政権が誕生しました。その一方で、メキシコでは、2018年暮れ、左派政権が誕生しました。

キューバは2015年に米国と54年ぶりに国交を回復しましたが、国交回復を推進したオバマ政権に代わって登場したトランプ政権はキューバ敵視政策に転換、両国関係は悪化の一途をたどっています。

こうした変化をもたらしたものは何なのか、これからラテンアメリカはどこへ向かうのか。私たちの関心は尽きません。フォーラムでは、ラテンアメリカ情勢に詳しい明治大学准教授の所康弘さんらにラテンアメリカの最新の状況と展望を語っていただきます。

講演 ラテンアメリカはいま

グローバル資本主義の視点からみる

講師 所 康弘さん 明治大学准教授

ラテンアメリカ地域全体を見わたすと、2000年代初頭に起きた「左派」あるいは「中道左派」政権の台頭 — いわゆるピンク・タイド(pink tide) — は、2010年代に入って退潮を余儀なくされている。そのような中、メキシコでは「国家再生運動」の党首ロペス・オブラドールが大統領選で勝利し、一般的な見方では「左派」政権が誕生したといわれている。

他方、「21世紀の社会主義」を標榜してきたベネズエラの現況は、今の時代状況における社会変革の難しさや重大な問題をわたしたちに提起しているとおもわれる。

本講演では、メキシコやベネズエラをピックアップしながら、ラテンアメリカ地域におけるピンク・タイドの潮流の歴史的背景、また、その意義や限界を考えたい。



専門は国際貿易論、ラテンアメリカ経済。博士(商学)。メキシコ国立自治大学経済研究所客員研究員(2003~05年)を経て、現在、明治大学准教授。

著書 『北米地域統合と途上国経済』西田書店、『米州の貿易・開発と地域統合 新自由主義とポスト新自由主義を巡る相克』法律文化社/3000円+税(2018年度日本貿易学会研究奨励賞、2017年度明治大学連合駿台学会学術賞)ほか。

★もうお一人の講師を交渉中です。

報告 2019年メーデー国際ブリガダに参加して

山田太枝さん キューバ友好円卓会議会員

問合せ■キューバ友好円卓会議へFAXかe-mailでお問い合わせください

革命から60年、キューバ新時代へ

録音の書き起し・要約文責 井ノ上節子／写真 安田 清



講演1 キューバ憲法改正のプロセス

クラウディオ・モンソンさん 駐日キューバ大使館二等書記官

海外在住キューバ人が初めて討議に参加

報道・情報はマスメディアで操作されたものが多く、本当に起きていることが伝わりにくい。説明する機会を与えていただきありがたい。

キューバは、90年代までソ連と社会主義圏に依存していたが、ソ連崩壊後1年で貿易は85%、GDPは2年で35%減った。それまで拒否していた市場原理を取り入れ、外資を招くこととなった。これは、危機を乗り越えるための一時的必要悪と考えられた。

2008年から現代化(update process)の過程に入った。市場原理とは、一時的ではなく、社会保障、医療、教育保障に矛盾しないところで共存せねばという考えが一般的になってきた。こうした市場原理の一般化が現代化であり、今度の憲法改正の基盤となっている。

旧憲法は違う世界の枠組みのもので、見直す必要に迫られた。2014年にワーキンググループが作られ、憲法の研究が開始された。2018年に憲法改正委員会が設立され、集中審議に入った。この年8月から11月は、世界でも例をみないプロセスになった。つまり、国民が意見を言う機会があり、結果、草案に60%の変更を加えることになった。

また、海外在住キューバ人が初めて討議に参加した。マイアミのキューバ人も、反革命といった政治的理由でなく、経済的理由で国を出たということで討議に参加した。新憲法は2月24日の国民投票を経て、2019年4月19日に発布される。

新憲法の政治的、経済的基本

新憲法の変更点、あるいは、性格と言えるところはどこか。

政治的基本点は、キューバは法治社会主義国家ということ。共産党については、今まで通り。反ファシズム、反新植民地主義、核兵器反対などの原則も入っている。

経済的基本点については、生産手段は、全国民による社会主義的所有としたが、これは新しい概念と言える。外資導入と生産手段の個人所有は、初めて憲法に書かれたが、社会保障やその他の権利と矛盾しないところまでは認められる。限界があるということで、経済成長、外貨準備等により制限されるとも考えられる。資産の蓄積は、政府によって規制されるとあるが、これは草案に、蓄積が起きないよう政府が規制するとあったのが変更され、緩められた。

権利や保障の拡大、認められた同性婚

草案には共産主義の概念が無かったが、討議の結果、目指すとされた。国民によって憲法に入れられたということだ。

権利や保障が、今までより拡大され、一箇所にまとめられた。これは、国家がそれらを強め、守る義務を負うということ。平和的な目的をもつ集会が 権利として認められた。

また、少子高齢化社会であることから、高齢者の保護も権利として入った。すべての種類の差別が否定された。旧憲法では、婚姻は男性と女性による法的な承認が必要、とされていたが、新憲法では配偶者が異性である必要性が削除され、同性婚が認められた。さらに、ハイビアスコパス（人身保護）が入ったことは、人権保護の面から見て注目すべきことだ。

選挙権を持つ人の 86%が支持

国家と政府の構造に関しては、大統領、首相、国会議長をそれぞれ別の人とした。カストロは歴史的リーダーということになった。今のキューバはパーソナリティーに頼れないし、制限しないといけない。ポストは2期10年まで。官僚主義を無くすための対策として、地方政府、地方議会が国会と同等に存在する。

海外を含め900万人のキューバ人が討議に参加し、選挙権を持つ人の90.15%が投票し、86%が支持した。これは、現状理解のための大事なポイントだろう。

講演2 キューバに住んで 一日本の銀行口座が凍結された話

岩村健二郎さん 早稲田大学法学部准教授

銀行口座凍結にとどまらない米国OFACの圧力



キューバには、学生時代、1989年に初めて行った。今度は、大学の研究制度を利用して、去年から1年間、妻と5歳、8歳の子どもも一緒に滞在した。1年間暮らしたらどうということが起ったかを話したい。

滞在して半年過ぎた時、三菱UFJ銀行から銀行口座凍結の通知が来た。差出人は六本木支店だけで住所も連絡先もない。今後どうしたらいいかも書いて無い。これは、アメリカ合衆国のOFAC（財務省外国資産管理室）が、キューバと取引をさせないように圧力をかける施策だ。日本の銀行は、米
国から制裁が科せられないように予防的にやるのだ。

VISAデビットカードで唯一現金をATMで下ろせるので、その用意はしていた。帰国しても三菱UFJ銀行と、納得できないとやりあっている。

OFACの圧力は、これに留まらない。海外旅行保険は、大学から出かけるとなると強制的に加入させられるが、キューバで怪我をして自分で立替え払いをしても、死んで遺体搬送となって数千万円かかっても規制で払われない可能性がある。理不尽な話だが、米国、日本、キューバのネットワークの中で行動しなければならないという現状がある。

4年もかかった家族ビザの取得

89年ごろのキューバは、車がバンバン走って、食べ物に困窮しているということではなかった。その後、自分がやりたい方向でキューバに関わりたと思って、大学院に行って研究者になった。キューバの人に対して何ができるか、アウトプットしながらの関係性を考えていた。キューバに行く機会はあったが、好きな音楽活動もあって控えていた。今回30年ぶりに再訪が実現した。

家族ビザを取るのが難しかった。来日したハバナ大学の学長を通し、法学部学部長に直談判したりしてやっととれたが、4年かかった。これがあると、人民ペソで物が買えるから、キューバで生活するには極めて重要なものだ。

OFACのせいで、観光目的で米国からキューバへ直接入れないが、家族ビザならノーチェック。これでメキシコとマイアミに行って帰ってきた。メキシコはキューバで手に入れにくい薬を買うため、マイアミは研究のためだ。

モノがないと出てくる根源的な恐怖感

キューバにはモノがない。無さ過ぎるのか、日本にモノがあり過ぎるのかという問いかけを、この1年間やらねばならなかった。

キューバへはスーツケース24箱を持ち込んだ。ほとんどが食材。それでも足りなくなって、日本からたくさん人を呼んで食材を運んでもらい、フルアテンドしてハバナ観光してもらった。

モノがないと根源的な恐怖感が出てくる。何とかキープしておこうとする。膨大な時間と労力を生活の中にメカニックに入れていく。そうしないと生活基盤が成り立たない。アフィンという洗剤が店に大量にあると、つい写真を撮りたくなるくらい。これは最強の洗剤だが泡立たないし、すぐ無くなってしまふ。キューバには、太陽光線が無限にある。簡単に拭い去れないくらいの良い印象だ。

電動バイクで乗り切った交通問題

インフラの問題の一番は交通問題。車はあるが、中古のハイエースは1千万円するし、レンタカーは月50万円かかる。住んでいたのは、カサ・パルティクラール(民宿)で郊外のミラマールにあり、大学はベダード、行くのは、旧市街のアーカイブスだった。タクシーは1回20ドルかかる。乗り合いはマキナといい、20ペソで80円だがいつ来るか分からない。路線バスは、凄い混雑で盗難も多い。

母屋の退役軍人のペニャーニエさんに、お金を払って車で送ってもらった。彼の週末は、必ず車のメンテナンスと決まっていた。彼が使っていないリチウム電池で走る電動バイクを借りた。ナンバーは要らないし、外国人は6か月以内なら免許も要らない。ヘルメットにサングラス。これは必須だ。ミラマールは海沿いで、海水混じりの砂と日射しに耐えるためだ。このバイク無しでは、生きられなかった。

停電が最大の問題、インターネットは日進月歩

ケータイ電話のバッテリーは命綱だ。

停電が最大の問題。嵐が来ると、ヤシの木が倒れ、電線が切れ、電柱が火事になって停電となる。6時間の計画停電もある。フリーザーの肉が腐る。ガスも止まる。水道の断水も。水を貯めていたが、汗を流せない、ご飯作れないで苦労した。

インターネットは日進月歩で進んでいる。公衆Wi-Fiが一般化して、旅行者も1時間1ドルでネットワークに入れる。12月にデータ通信が解禁され、普通のケータイで通信できるようになった。旅行者は、アカウントが作れないのでできないが、歩きスマホで人や木にぶつかる人もいる。

研究のため、家で20mの鉄塔の上にマイクロテックという公衆Wi-Fi電波を集めて家に引き込む装置をつけたら、2回付けて2回とも盗まれた。

情報インフラは、新しい世界再編にかかわることで、これが無いと取り残されてしまう。情報インフラ自由化に対して、政府は慎重にやってきたが、今後もっと変わる可能性がある。キューバは頑張ってupdateをやっていると思う。

医師の技術はハイレベル

生きるために何を食べるか。肉は週2回、塊で買って切り分ける。魚も豊富だが、道端で売っているのは危ないから、知人が漁師と契約していて、そのルートで手に入れたのを、刺身にしたりする。野菜は泥だらけのを、

水没させて虫を殺して洗うが、半日かかる。

中国製浄水器は便利だった。無いとミネラルウォーターを大量に買わねばならない。持って帰るのが重い。アボカドが美味しかった。

ミラマールに外国人専用の病院があって、新しく口腔外科ができ、妻が治療してもらった。看護師さんは黒タイツでマニキュアをしていたが、医師の技術はハイレベルだった。

素晴らしかった子どもの教育

家族で行って良かったことは、子どもの教育が素晴らしかったことだ。学校から帰った子どもが、すぐまた学校に行くと言ったりする。人びとは子どもには凄く親切で、近所の子と毎日のように遊んでいられた。あの天候と環境で、のびのび過ごせて、本当に感謝している。

僕は何をしていたか。20世紀初頭のキューバ奴隷解放後の人道主義の研究で、1908年ごろの白人の幼児誘拐事件の一次資料に当たって調査し、シンポジウムで発表した。

キューバアフリカ系文化はいろいろあるが、マイアミでは、アダホアという秘密結社が今もあり、30年前から機会を伺っていたが、訪ねて行った。お近づきになりたいということだ。

会員・読者から円卓会議への手紙

キューバ友好円卓会議の皆様へ

「サルー」を拝受いたしました。この間気ぜわしい日々が続き、1回目を通しただけですが、キューバの今、そして未来に心よせておられる会員の思いが私のような者にも伝わってまいります。

時代と共に人も国も変わるのが当然です。よく「十年一昔」といいますが、革命以来6つの昔が過ぎていきましたし、その間にはキューバ危機、ソ連崩壊という重大な危機がありました。さらにアメリカの経済制裁の中での観光客の受け入れに伴う様々な問題。外国と接することのできる人とそうでない人との格差の問題、多くの国難にさらされながら、背筋を伸ばした国作りをしてきたキューバ、そしてキューバの人々には敬意を表さざるを得ません。日本と違い「貧すれど鈍ならず」ですね。

東京からこの地に来て思うのは医療の貧弱さです。今年は中核となる医院の封鎖が大きな問題となっています。キューバなら政府がほおっておきません。

何もしておりませんが、応援者です。どうかお見知りおき下さい。乱文乱筆をお許し下さい。

2019年3月16日 新潟県中魚沼郡津南町 Y・S

自根 金の キューバの呪い ⑦

小さな広場に建つ パパの小さなブロンズ像



1955 年製ダッジに 8 人

1960 年 10 月、パパ・ヘミングウェイは艶やかな痕跡をハバナとその周辺に残して、22 年間住み続けた島を後にした。素朴で屈託のないキューバの人々を愛し、豪快で気さくな人柄が愛されたパパの不在に、誰しもが喪失感を胸に刻んだ。後にはハリウッドの大スター、ゲーリー・クーパーやエヴァ・ガードナー、名闘牛士アントニオ・オルドニェス、ボクシング王者のロッキー・マルシアーノらが滞在したフィンカ・ビヒアの邸宅と、愛艇ピラルール号が残された。船長だったグレゴリオ・フエンテスは、回遊する巨大なマリーンの魚影を追って、「ヘミングウェイの 1 マイル」と呼ばれたハバナ沖のガルフ・ストリーム（メキシコ湾流）の潮目に舵を操った、パパの良き相棒だった。ハバナ近郊の漁村コヒマルにまだ健在と聞き、伝説の人物を一目見てみたいと思った。

撮影を終えて戻ると、邸宅の門でアナマリアが待っていた。夕焼け空の下、並んで家まで歩く。ふと思い出して「夕焼け小焼け」を口ずさんでみた。北極圏での植村直己やアマゾン源流での関野吉晴が、村人に受け入れてもらうにはまず子供を味方にする、子供と仲良くなるには童謡が一番、と探検業界の現場体験を語っていたのだ。試してみれば効果抜群、アナマリアはつないだ手を大きく振りながら、すぐ後に付いて口ずさみ始めた。角に停められた古いアメ車の窓から、ダニエルが眩しい笑顔を見せる。宿泊先近く中華料理店へ夕食に行こうと、近所の知り合いの車を借りて待っていてくれたのだった。

3 人家族に妹夫妻とその娘、従弟の合計 8 人、1955 年製ダッジの車内押しくら饅頭状態でハバナ市内に戻る。それらしきネオンサインのある不愛想なビルの前で車を降

りると、先ほど手渡された青シャツを着るように言われた。襟なし T シャツや短パンは NG、というドレスコードがあるのだとか。テーブルに着くと、まず前菜に出てきたのはパイヤとグアバの盛り合わせという不思議な展開である。中国と日本の区別もはっきりしないごく普通のキューバ人たちに、拙いスペイン語で料理の説明するのは大変だ。それより何より心配なのは食事代の支払い。奥のテーブルは金日成バッチを胸に輝かした北朝鮮の外交官グループ、その隣はロシア人観光客か。外貨払いのみだろうし、8 名分でいくらになるのか不安がつもの。せめて割り勘ではと、悩みの種は尽きず。料理も味付けはどれもほぼ同じで、キューバ製醤油の限界を思わせる。食後にはやはり、熱帯夜のように濃くて甘いコーヒーと葉巻まで出てきた。いつの間にかダニエルは勘定を済ませていた。ケチ臭いことを心配していた自分が情けなくなる。遠い国から来てくれた友人は大事にしなきゃ、と笑うダニエル。ごつい顔に似合わず、実にいいヤツだ。

翌々日、レンタカーでカリブ海屈指のビーチリゾート、バラデロ取材。ご馳走になったお礼を兼ねて、道案内役にダニエル一家を誘うことにした。慌ただしい取材終了後、帰路にパパゆかりのコヒマルに寄り道すると、なんとグレゴリオ船長その人が自宅のテラスで夕涼みしているところに遭遇した。すかさず直撃し、写真も撮らしてもらう。「あのパパが自殺なんかするはずはない。CIA に暗殺されたのは間違いない」とのありがたいお言葉を頂戴することまでできた。

ピラルール号が係留されていた波止場に面したコヒマルの広場には、地元の漁師たちがパパを偲んで建てた胸像が残されている。荒海を恐れない勇敢で無骨な漁師たちが、パパの自死数日後に誰いともなく集まって決めたのだ

った。経済封鎖で素材の青銅が手に入らないという彫刻家の言葉に、漁師たちは自分の船のスクリューを外して持ち寄った。漁に出られなくなることも、銅像を建てることの方がよほど大切だと皆が思っていた。パパが生前よくバミューダショーツに野球帽姿で歩いていた小さな広場に建つ小さなブロンズ像は、今も穏やかな表情でコバルトブルーの海を眺めている。(続く)

しらね ぜん

日本で唯一、世界中でも2人しかいないカーニバル評論家、ラテン系写真家。東京出身。青山学院大学卒。仕事(撮影取材調査渉外観察記録編集企画制作など)その他(探検冒険踏破潜入縦断横断登攀釣魚沈没など)さまざまな理由で現地に入り浸っている。人類400万年の旅グレートジャーニーのサポート、コーディネイトも担当。これまでに訪れた国は、6大陸、150カ国超。ラテンアメリカとカリブ海域の主なカーニバルはすべて制覇。定点観測と路上観察を続けているキューバは、1989年以来、30回目の訪問をマークした。



報告 ベネズエラを知る集い

2019年7月7日 於: 明治大学リバティータワー (駿河台キャンパス)

講演 伊高浩昭さん

ラテンアメリカ研究者/ジャーナリスト

ベネズエラの問題はベネズエラ人自身に任せよ

7月7日、東京の明治大学リバティータワーの一室で「ベネズエラを知る集い」が催されました。南米のベネズエラの情勢が緊迫して世界の注目を集めています。日本ではその関連の報道が乏しく、中には偏った報道もあるため、現地の状況をもっと正確に知ろうという狙いで、キューバ友好団体の関係者を中心とする実行委員会が開いたものです。キューバ友好円卓会議からも事務局メンバーが実行委に加わりました。当日は予想を上回る約170人が詰めかけ、盛会でした。

集いでは、「ベネズエラ問題の深層」と題して元共同通信記者の伊高浩昭さんが講演しました。

伊高さんは1960年代後半からラテンアメリカ諸国に長期滞り、取材・報道を担いました。約50年前の1970年代初めにベネズエラに入り、その時々状況を取材・報道したとのこと。冒頭、ある逸話を話されました。それは、こういうものでした。

「日本のいくつかの商社は、カラカスに支店を置いていた。ある支店長が東京から着任してきて、当時日本で最高といわれたウイスキーを持って、ベネズエラの高官、日本でいう通産省の大臣に挨拶に行っただけです。それから30分くらい経ち、支店長を送ってきた運転手が駐車場から帰ってきて支店長に『さっき、あなたが持って行かれたウイスキーを同僚の運転手が持っていますよ』と言ったというんですね。つまり、当時のベネズエラの人には最高級のスコッチ・ウイスキーしか飲まなかったんですね。日本のウイスキーなんて歯牙にもかけなかった。それは何を意味していたかということ、当時はこの国に石油景気がありまして、ベネズエラはラテンアメリカで1人当たりの国民所得がトップだったんです。その次がアルゼンチンぐらいですかね。だから、高速道路があり、自動車が走り回り、東京と比べてみても発展した社会でした」

こうした逸話から始まった講演は1時間半に及びましたが、それを詳述する紙面の余裕がないので、伊高さんが最後に話されたことだけを紹介します。それは、こういうことでした。

「ベネズエラの今日の問題は、石油だけに頼ってきたことに遠因がある。そのため、国内の生産工業を育ててこなかった。食料も輸入した方が安くすむということをやってきた。しかし、石油収入が減ってしまったために、それが今日の薬品不足と食糧不足につながっている。そこに一方的に米国が経済封鎖を強いてきた。銀行口座を留めたり、ベネズエラ資産を凍結させるなど、昔の言葉で言うと兵糧攻めだ。ベネズエラの問題はベネズエラ人自身の解決に任せるべきだ。米国は(ラテンアメリカが)自分の裏庭ではないと、声を大にして叫ばないと。この二つをごちゃごちゃにしているから、分かりにくい」

草野耕治 2019. 7. 15記



2019 メーデー国際ブリガダ参加とハバナ印象記

山田太枝 キューバ友好円卓会議会員



革命広場でメーデー行進するキューバ民衆

ハバナで毎年行われるメーデーブリガダへの参加は、今回で2回目となる。今年は、ベネズエラが崩壊させられる危機を座視しておられず、何が出来るわけでもないが、せめて、キューバ民衆と一緒に、アメリカの干渉反対を意思表示したいと思い、キューバにはせ参じた。

4年前のキューバは、米国との国交回復が始まろうとする期待で湧いていた。しかし、トランプ大統領の登場とヨーロッパ・中南米を覆う右傾化のなかで、今、再び、危機が訪れているかに見える。ディアスカネル船長の操縦するキューバ丸の前に、カリブの波高しといった情勢だ。直近のキューバを知りたくて、ハバナをめぐる日程も組んだ。

ブリガダは、4月22日から5月5日まで2週間にわたり、ハバナ郊外の国際キャンプ場で行われる様々な催しに、世界中から集まった400名を超えるキューバ連帯組織のメンバーやキューバファンが集う。

個人参加が多く、希望者は一切の制限なしに参加を認められ、日本円で約6万円という低額な費用で、宿泊・移動・見学・食事のすべてを提供してくれる。保守・左翼を問わないのももちろん、今時、社会主義などカルト扱いで見向きもしない世界中の若者がキューバに集まってくる。もちろん、日本からも若者が旅行や留学に来ている。

主催はICAP、キューバ諸国民友好協会、2週間の内、山場は5月1日のメーデーと翌日のキューバ連帯国際会議、そしてブリガダ参加者が自国紹介の出し物をしながら、老若男女踊りまくる最後のインターナショナルナイトで圧巻の最後を締めくくる。以下は、4年前と比較しながらの、かいつまんだブリガダ紹介とハバナの変容の印象記である。

キューバとベネズエラ

キューバにとって、チャベス政権以来、ベネズエラから供給されていた石油は生命線に等しい。そのベネズエラの経済が崩壊状態になっている。ハバナでは1年前からガソリンの価格が上がり、タクシー代が急騰している。

キューバを支援してきたベネズエラは、今や、米国のトランプ大統領の軍事介入恫喝や、軍事クーデターの画策で国際的に孤立させられている。中南米最大の国、ブラジルも激変した。左翼政権だったブラジル労働党のルラ前大統領は収監され、ブラジルのトランプと言われる極右のボルソナロ大統領が出現した。中南米に左翼政権が林立したのはついこの前のような気がするが、世界中の右傾化、極右政党の伸長の中で、中南米の政治地図は大きく塗り替えられた。米国の軍産複合体やタカ派にとってはチャンス到来だ。世界最大の石油埋蔵量を有するともいわれるベネズエラを自国の石油貯蔵庫にするため、牙をむいている。

今、ハバナでは、ブラジルから輸入していた鶏肉が、トランプの経済制裁の強化のため、一般市民には手に入りにくくなっている。スーパーには鶏肉を求める市民が列をなしていた。税金を納めるホテル・レストランなどへ優先的に配分するので、国営企業の店は後回しになる。それで、突然、物資欠乏になるというわけである。

ハバナ市民が語る、生活防衛の涙ぐましい手練手管を拝聴していると、不用品であふれかえっている日本から何とかして持ってこれないものかと本気で考えてしまう。

キューバ政府はもちろんのこと、ブリガダ参加者達、国際会議の各国代表達、いずれもベネズエラへの米国からの内政干渉・軍事侵略に対する厳しい指弾が相次いだ。これは、ハバナ市民たちも同様で、キューバ政府に批判的なカーサの経営者でさえも、こぶしを振り上げて、米国の干渉に怒りの声を上げていた。



農作業をするブリガーダ参加者達

だが、ただ、一つ気になったことがあった。ブラジルからの参加者が多かった

せいなのだろうか、ブリガーダのキャンプ場や国際会議の巨大な会場には、ブラジル前大統領のルラを釈放せよという写真付きの横断幕やポスターが至る所に見られた。もちろんチャベスの写真もあった。しかし、今現在、国家崩壊の局面にあるベネズエラのマドウロ大統領の写真は見当たらなかったのである。

ブリガーダ参加中、幾度となく聞かされた「ルラを解放せよ！」というコールは今でも耳に焼き付いている。だが、マドウロを守れというコールは聞かなかった気がする。私にはそれがとても不思議だった。私の聞き落としだったのかもしれないが。

私は、4年前のメーデーの時、革命広場で目撃したマドウロ大統領の姿が忘れられない。その日は雨だった。ラウル・カストロが退場しても、マドウロは濡れながら、演台に一人悄然と立ち尽くして、いつまでもメーデーの大観衆を見つめていた。それはチャベスのプラカードを掲げるキューバの大群衆の熱気と釣り合いだった。今から思えば、まるで4年後の我が身を予見していたかのように思える。この時すでにベネズエラは、ハイパーインフレに襲われていた。

ブリガーダ参加者の変化

キューバ革命 60 周年とあって、ブリガーダ参加者は例年の2倍を超え400名以上に膨れ上がっていた。人数だけでなく、今年は参加者に、ある種の変化が生じていた。ベトナムや韓国から大量の若者達が参加してきて、ブリガーダ参加者の世代交代とでもいべき雰囲気が生じていたのである。もちろん、ブリガーダ参加者のコア部分は、失礼を重々承知の上で言わせていただくと、20世紀社会主義博物館に鎮座させたいようなオールドレフト系のノスタルジックシニア（と私には見受けられる）である。象徴的な例を2つ挙げる。

事例①

ドイツ共産党から高齢の2人の参加者が来ていた。うち1人は、アメリカ人と見まがう、快活な好感の持てる西ドイツ出身の自称コミュニストだった。もう1人は、絵にかいたような無表情の堅物ドイツ人で東ドイツ出身者だ。（彼も最後には、不器用に、しかし楽しそうにサル

サを踊りまくっていたところを見ると、無愛想なのは外目だけなのかもしれない）

彼らとの会話の中で私は啞然として絶句することが何度もあった。

「旧東ドイツのホーネッカー体制をもちろん支持している」

「シュタージ（東ドイツの秘密警察、極端な住民監視で悪名高い）は優れた諜報組織だ。NATO軍の上層部にスパイとして食い込んだ。間抜けな西側諜報組織は長年気が付かなかった」

「ゾルゲを知っているか、超優秀な諜報員だった」

ゾルゲの名が出た途端、無愛想な東ドイツの方が、突然、破顔一笑、拳を振り上げて「ゾルゲ、ゾルゲ」とうれしそうに連呼した。私は一瞬、微妙な気分陥った。80年前の出来事に過敏に反応するドイツ人の不可思議さについていけなかったことと、自分が日本人であることを思い出したからだ。

「北朝鮮の金正恩体制を支持する、もちろんだ」

これには、私もさすがに驚いて、理由を問うと、即座に「アンチ帝国主義だからだ」が返ってきた。

快活な旧西ドイツ氏の方が嘆く。「今や、ドイツ共産党はドイツ全国で5000人しかいない」

これでは無理もない、ドイツ人じゃなくなつて、今時、こんな考え、誰もついていけない。しかし、自分たちが正しいという信念は揺るぎなさそうなのである。私は、コミンテルン時代から時代感覚が止まっているように見える化石のような2人と、世界情勢について会話するのはあきらめた。

しかしこの旧西ドイツ氏が快活な好感の持てる人物だったことは間違いない。ブリガーダ最後の、インターナショナルナイトの出し物で、2人は、ドイツ語で大演説と革命歌を高らかに披露し、喝采を浴びていた。これはこれで意味があるのだろう。60年間にわたり米国と戦い続けて、奇跡の存続を果たしている小国キューバを支援しているのだから。

事例②

60代と思しき、ペルー共産党の男性と会話した時のことである。彼は一見して、たたき上げの労働者風の闘士だ。圧倒的にインテリ層が多い参加者の中では、目つきの鋭さから結構目立つ人物である。私を日本人と知って、フジモリ前大統領の批判などを話し始めたが、スターリンを称揚するに及んで、私は驚いた。今時、何処の社会主義国でもスターリン否定は、明示かどうかを問わず、世界的な前提となっていると思っていたからだ。

だが、社会主義の国際主義に頼らざるを得なければ潰されてしまうような国は、コミンテルン時代よろしく、どんなに国内で抑圧体制を敷いていたとしても、救世主なのだろう。日本のように、「保守がアメリカの靴の裏をなめてくれて、おいしいおまんまにありつけて、これだけ豊かに便利に生きていられるなんて、資源無しの小国にしては、一番うまい方法じゃないか」という過半数の国民の本音に支えられている国とは、わけが違うのである。しかし、そうだとすると、「レーニンとスターリンは同じなんだ」とあくまで主張する彼にはついていけなかった。

若い世代の登場

ブリガーダには、世界から多くの若者が参加しているのが特徴だ。今年も、特に、ベトナムや韓国やガーナから大量の若者達が参加していた。彼らは明らかにシニアグループとは違っている。

例えばベトナムの大量の若者達は、政府から公共事業の仕事がらみで派遣されてきた公務員だ。ほとんどがベトナム共産党のエリート風である。結論から先に言うと、緊迫したベネズエラ情勢の講演の最中でも、スマホに興じる今時の若者たちで、社会主義など関心の埒外といった雰囲気漂わせている。つまり、世界の大都市の若者と同じだ。ベトナムの若い女性たちもお洒落に余念がなく、社会主義の片鱗も見当たらない風情だ。

ガーナから来たエリートの公務員の若い女性にも驚いた。「私は、水道ビジネスの関係で、ガーナのクマシからきている。南アフリカの過激なANC（アフリカ民族会議）のような組織は嫌いだ」といって顔を歪めたのだ。

インターナショナルナイトは、各国参加者が自国をアピールする祭りの場で、ある種、国の勢いのようなものが感じ取れる。数十か国の参加国の中で、やんやの喝采を浴びたのは、南アフリカと韓国だった。その凄まじい迫力に、会場は度肝を抜かれたと言ってもいい。演壇を埋めつくす大量の参加者の数もすごい。彼らはエンターテイナーの素質があるのだろう。

例えば、韓国の参加者は、踊りながらアヒランを謳い、自分たちの労働運動の闘いを宣伝した。もちろん、演説のうまいリーダーが韓国語で。最後は、数百人の参加者とサルサで盛り上がる。実に巧みな演出で、韓国人の才能に舌を巻いた。

ハバナ点描

4年前と比較して驚いたのは、自動車の数が激増していたことだ。それも、あのおんぼろのアメ車ではなく、

新しい車だ。アメ車もきれいに塗装されたものが多い。ゆっくり散歩できたマレコン海岸通りは車の通りが激しくなり、横断するのがひと苦労だ。

カーサ（民泊）も激増している。カーサだらけである。当然だ。公務員の給料は2、3千円だから、何も買えない。兌換ペソを入手できるか否かが、生殺与奪を握る。

「皆、金のために脱出をするか、サイドビジネスを見つけるか、二つに一つだ」。キューバ人の若い人たちの本音だ。政府とて給料を上げてやりたいものの、何しろ国営企業がほとんどなので、税金を払う人がほとんどおらず、財源がない。

4年前、兌換ペソと人民ペソを統一することが、キューバ政府の悲願だと聞いたが、まだ、実現していない。社会主義経済の矛盾に呻吟するキューバ国民と政府を目の当たりに見て、切ないとしか表現のしようがない。

富裕層は明らかに増えていた。ハバナの街を歩いているとよくわかる。民営化を推進しているのだから当然である。

私は、4年前、初めてキューバに来た。政府のプロパガンダを信じない私は、政府に不満を持つ若者の話を聞いて回った。しかし、私が見たのは、人種差別を克服しようとしてきたキューバ政府の努力が結実している現状だった。

また、子どもたちの満ち足りた幸福そうな姿も見た。そして、老人と障がい者が大切にされているのも見た。そして、60年間の長きにわたり、あの米国の干渉と経済制裁を受けながら、生き続けて来た奇跡の国が存続していることを知った。そして1か月後に、再び、政府側からキューバの実体を見るべく、ブリガーダに参加した。この基本認識は今も変わっていない。

キューバは、20世紀における壮大な人類の実験、すなわち、社会主義イデオロギー国家建設の実験をしている途上ととってもいい。その運命は予断を許さないが、キューバが残した努力、ヒューマンイズムの実現という壮大な実験の成果は継承されると信じていたい。



メーデーブリガーダに参加した日本人女性達

キューバ外務省声明

キューバ外務省は、キューバに対する米国の攻撃的行動の新たなエスカレートを断固として拒絶する

米務省は本日 2017 年 11 月に米国政府により作成され、その1年後に改定された「キューバ制裁団体リスト」に含まれているキューバ企業に対してのみ、来る3月 19 日以降ヘルムズ・バートン法第3章に基づき米国の法廷における訴訟提起を認める決定を発表した。封鎖強化とその域外適用の拡大を目的としたこの恣意的で違法なリストは、米国市民がそこに掲載されている団体と直接の金融取引を行うことを禁じるものである。

米務省はまた、キューバで商業・経済活動に従事するその他のキューバまたは外国の団体に対する同内容の訴訟提起許可の適用をわずか 30 日間凍結すると発表した。

ヘルムズ・バートン法は 1996 年の発効以来、第三国の政府ならびに企業に対する米国の苛烈で違法な圧力を通して経済封鎖の普遍化を試みてきた。キューバ経済の息の根を止め、国民を窮乏させることで、キューバに米国の利益に沿う政府を設置することを目的としている。

その主張するところは違法かつ国際法に反しており、ヘルムズ・バートン法と封鎖は、主要な地域機関・国際機関において約 30 年間にわたり、あまねく拒絶されている。最も最近の例は、国連総会である。昨年 11 月 1 日、米国提案は 10 回連続で否決され、米国政府は完全に孤立した。

ヘルムズ・バートン法第2章の規定によれば、革命政府の転覆、その後の米国の監督による統治、そしてワシントンに従属する反革命政府の設立の明白な任務は、土地の旧所有者もしくはその子孫により権利請求される全ての土地について、土地の国有化もしくは放棄の時点で所有者が米国市民だったかどうかにかかわらず、その旧所有者に対する返還もしくは支払いをすることである。その期間の間も、経済封鎖は完全に効力を維持することとなっている。

すなわち、キューバ人にとっては、自らの住居、居住地域の土地作物を栽培し収穫する農地、子供たちが教育を受ける学校、医療サービスを楽しむ診療所や総合病院、職場、自営業を営む場所、ならびに電気や水道や通信などの公共サービスに対する訴訟に対して、返還、賠償、支払い等の義務が生じることとなるであろう。

それは、キューバを植民地とみなしている人々の頭の中にしか生じない主張である。ヘルムズ・バートン法によれば、経済封鎖はその野心が達成されて初めて解除されるものである。

同法は二つの根本的な嘘に根差している。革命直後に実施された国有化が違法もしくは不当なものであり、かつキューバが米国の安全保障上の脅威であるという見解である。

キューバの国有化は法令の保護下で、憲法と国際法を完全に遵守する形で実施された。すべての国有化において公平で適切な補償プロセスが含まれていたが、米国政府は検討を拒否した。キューバは米国以外の国々、スペインやスイス、カナダ、英国、ドイツ、フランスと包括補償合意に達し、忠実に履行した。これらの国々は今日、キューバ国内に投資している。

ラテンアメリカ・カリブ海の平和と安全に対する真の脅威は、米国政府の無責任な発言と行動であり、同地域でのモンロー主義の強要という公然たる熱意に支えられた不安定化計画である。

「キューバの尊厳と主権の再確認に関する法」(1996 年 12 月 24 日)の定めるところでは、ヘルムズ・バートン法は違法かつ適用不可能、いかなる法的価値も法的効力もない。同法に準拠するいかなる損害賠償請求も、提起者が個人であれ法人であれ、これを無効とみなす。

同法の規定によると、国有化された資産を巡る損害賠償請求は、キューバ政府と米国政府間の相互尊重と平等の精神に基づく協議プロセスにおいて、その構成要素となり得るものである。「当該請求については、米国政府が責めを負うべき経済封鎖とあらゆる種類の攻撃によってキューバ国及び国民が被った損害の賠償請求と並行して精査されるものである」。同時に「ヘルムズ・バートン法のメカニズム及び手続を他者の不利になるように利用する者は、将来実現しうる協議から排除される」と明記している。

キューバ政府は、経済パートナー及びキューバで事業展開する外国企業に対して、外国投資と合併事業に関するすべての保証を重ねて言明する。2019 年4月 24 日の国民投票でキューバ新憲法は圧倒的多数により承認されたが、その第 28 条もまた一連の保証を認めている。これらは「外国投資法法律第 118 号」(2014 年3月 29 日)にも明記されている。

本日の決定は、我々の経済発展及び前進の目標にとって追加的な障害となる。しかし米国は、キューバ人の主権的意思と社会主義建設の決意を力づくで屈服させるという中心目標において、今後も失敗を重ねるであろう。キューバと米国間の関係改善と理性的で敬意ある共存を支持する、両国民の多数派の感情が優勢となるであろう。

2019 年3月4日、ハバナ